

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3748 号 2017.6.30 発行

<年金プア 不安の中で> 66歳男性 昼夜問わず働くしか

中日新聞 2017年6月29日

老齢年金の受給額が少なくて日々のやりくりが大変な「年金プア」が増え続けている。日本の公的年金は、国民年金と厚生年金の2階建ての構造。自営業者や非正規労働者などの国民年金加入者の老齢年金は老齢基礎年金だけなのに対し、会社員や公務員などの厚生年金加入者は老齢厚生年金が上乘せされる。このため、他の収入

や貯蓄が少ない場合は、高齢の自営業者らが貧困に陥りやすい。「貯金がいつかなくなるのでは」という重い不安を抱える年金プアの苦しい生活をシリーズで紹介する。(白井康彦)

雨漏りがする古い借家。東海地方で一人暮らしをする六十六歳の男性が暮らしぶりを説明してくれた。「会社員だった人たちは年金だけの収入でもよく旅行に行きますが、自分は考えもしない。まともな買い物もしない。食べ物以外で買うのは下着類くらい。必死で節約し続けないと、近い将来に行き詰まることが確実ですから」

住まいは二階建て住宅で、家賃は月六万五千元。「一人で暮らすには少し広いのですが、仕事で使うスペースもあるので仕方ありません」という。男性は、運送会社から仕事を請け負う個人事業主の運転手。週一日の休み以外は、運送会社に午前六時半に出向き、午後十一時ごろに帰宅する日々だ。「時間に追われているので、食べ物はほとんどコンビニ弁当です」

国民年金に入るのは自営業者や非正規労働者など。満額の老齢基礎年金（国民年金）でも月約六万五千元にすぎない。この男性の場合は、老齢年金はそれより少し多く、月九万三千元だ。若い頃に会社勤めで厚生年金加入者だった期間があるため、老齢基礎年金に三万円あまりの老齢厚生年金がプラスされている。

ただ、貯蓄はわずか百二十万円ほど。経済的な援助をしてくれる親族もなく、「働かないと毎月五万円ぐらいの赤字で、貯金が二年で尽きてしまう計算。だから働くしかありません」。

早朝から深夜に及ぶ仕事ながら、経費や税・社会保険料、家賃、車のローンなどを差し引くと手元に残るのは年金を含め月十万円ほど。仕事は正直、体にこたえるが、続けるつもりという。ただ、「体が資本の仕事だけにどれだけ続けられるのか。あと十年できるのか、五年しかできないのか、そのあたりが一番気になります」。病気になったりすると職を失いかねないだけに、先行きへの

年金プアのやりくりのパターン



不安は尽きない。

「年金プアは見えにくい貧困層」。貧困問題に取り組む市民運動家らはこう口をそろえる。生活に必要な資金の足りない分を年金以外の方法で何とか確保せねばならない。主なものは、労働報酬、預貯金の取り崩し、親族からの援助、の三つ（右上の図参照）だが、十分、得られるとは限らない。年金が少ないため困窮生活を強いられている高齢者数について、NPO法人ほっとプラス（さいたま市見沼区）代表理事の藤田孝典さんは「生活保護基準のラインやそれ以下の暮らしをしている人は七百万人はいる」と指摘している。

<公的年金の平均年金額> 厚生労働省がまとめた2015年度の公的年金事業の概況によると、同年度末の老齢年金の平均受給月額が厚生年金受給者が約14万8000円であるのに対し、老齢基礎年金（国民年金）だけの受給者は約5万1000円にすぎない。公的年金の2階部分がない国民年金と2階建ての厚生年金の老齢年金月額は約10万円違うのが現状だ。65歳からの20年間では2400万円もの差になる。

全国ネット 農業と福祉、連携を 5府県知事、設立へ /三重

毎日新聞 2017年6月29日

鈴木英敬知事は27日、農業を福祉の現場に取り入れる「農福連携」を進めるため、三重など5府県知事が発起人になり「農福連携全国都道府県ネットワーク」を設立すると発表した。知事が発起人となる三重、岐阜、長野、島根県、京都府をはじめ30府県が参加予定で、7月12日に東京で設立総会を開く。

津市で昨年11月に開かれた「農福連携全国サミット in みえ」で採択された宣言で、全国各地域の連携が盛り込まれたことを受け、開催地の三重が設立を呼び掛けた。

ネットワークは、会長と副会長を知事が務め、各府県の農福連携の主管部長で組織する

カブトムシの季節到来 太良町で出荷始まる【佐賀県】 西日本新聞 2017年06月29日 佐賀西部コロニー昆虫の里が養殖したカブトムシ



太良町大浦の障害者の就労継続支援施設「佐賀西部コロニー昆虫の里」で28日、養殖したカブトムシの出荷が始まった。8月上旬まで県内外の旅館やホテルなどに約1万2000匹の出荷を予定している。

カブトムシの養殖は入所者の収入アップが目的で、木工製品を加工する際に出る木くずを活用して1984年に始めた。初日は雄を2匹ずつ入れたプラスチックケース50個を車に積み込み、白石町の佐賀西部コロニーの直売所「こだわり館」に運んだ。価格は雄380円、雌170円。

佐賀西部コロニーの中尾富嗣常務理事（45）は「自然に触れる機会が減った子どもたちに、カブトムシを手にとってほしい」と話している。昆虫の里＝0954（68）3211。

著者インタビュー 「発達障害」岩波明氏 日刊ゲンダイ 2017年6月29日 昭和大学付属鳥山病院の岩波明院長（C）日刊ゲンダイ



2005年に発達障害者支援法が施行され、人気モデルの栗原類やパリス・ヒルトンが発達障害だと公表したこともあり、発達障害がメディアで取り上げられることが増えている。半面、誤解や誤診も多い。

「空気が読めなかったり、同じ失敗を繰り返したりする身の回りの“困った人たち”をそれだけで発達障害ではないかと誤解したり、専門家でも社会を震撼させた重大な殺人犯を一面だけみて発達障害だと誤

診しているケースもあるんです」

本書は、発達障害の臨床研究第一人者の著者による発達障害の解説書。多くの事例を紹介しながら、周りの対処法や最先端の治療法を紹介している。

発達障害という言葉が独り歩きしているため、ひとつの疾患名のように思われているが、ASD（自閉症スペクトラム障害）やADHD（注意欠如多動性障害）などの疾患の総称である。

「アスペルガー症候群はASDの中の軽い疾患、自閉症はASDの中の重い疾患のことなんです。広い意味では発達障害には知的能力障害（精神遅滞）やコミュニケーション障害も含まれます。これらを合併している患者もいるので誤解されやすく、専門家でも診断を誤ってしまうんですね」

発達障害は生まれつきだが、成人してから発症するという誤解も多い。子供の頃から発症しているが、成績優秀でおとなしいとあまり問題視されないまま成長し、社会に出て行くためだ。

「私の患者は20、30代が多いですが、その年代になって初めて発症したわけではありません。学生時代は“変わっている”と思われていただけだったのが、就職や結婚をしてから、周囲と不適合を起こし、自ら、または周りに勧められて初めて受診する。それで、就職や結婚をする20、30代の患者が目立つんです」

整理や片づけができない、約束を守れないなどは誰にでもある事柄だけに、自分や周囲が「発達障害のためにできない」と理解していないと、「怠けている」「バカにしている」と誤解され、家庭や職場でうまくいかなくなる。本人は自信を失い、転職を繰り返したり引きこもり、うつ病になったり、離婚したりして孤立していく。

「ASDやADHDには学歴やクリエイティビティーが高い患者が多いんです。作家のアンデルセンやルイス・キャロルはASDだったのではないかとされています。だから、ネガティブに捉えず、彼らの能力を生かす対応法を知り、社会の一員として受け入れないともったいない」

たとえば、個人の能力が問われるアーティストや弁護士などの専門職は、障害があっても能力でカバーできるので才能を発揮できる。ADHDの患者は同時並行の仕事を振られるとパニックを起こし失敗するが、周囲が仕事をひとつずつ振る工夫をするだけでうまくやれるのだ。

著者の勤務する大学病院の発達障害外来では、デイケア治療を受けて社会復帰できた患者が、障害者雇用を含めると、3年間で3～6割に増えたというデータがある。

「とくに、患者同士で話し合うことがよいようです。患者は安心できるし、ほかの人がやっている対策を知り、自分なりの対策を考えられますから。もともと知的能力が高い患者が多いので、吸収は早いですね」（文藝春秋 820円＋税）

▽いわなみ・あきら 1959年、横浜生まれ。東京大学医学部卒業後、都立松沢病院などで臨床経験を積み、約10年前から成人期の発達障害に注力。2012年、昭和大学医学部精神医学講座主任教授に就任し、15年、同大学付属烏山病院長兼任となり日本初のADHD専門外来を担当している。

<生きる支える 心あわせて> (上) 脊髄小脳変性症と歩む ぎりぎりまで自力で

東京新聞 2017年6月28日

愛知県一宮市の自宅で、荒井欣也さん（49）が自室がある二階に上がるため、階段に取り付けたいす型のリフトに座ろうと試みる。しかし、うまくいかない。「おかしいなあ。腰のところを持って」。何度も尻もちをついた末、同居の母めぐみさん（83）に手伝いを頼んだ。手すりをつかむ荒井さんの腰をめぐみさんが支え「イチ、ニ、サン」。ようやく座れた。

荒井さんは、運動機能をつかさどる小脳の神経細胞が壊れ、体がうまく動かせなくなる

脊髄小脳変性症を患う。外では車いすを使うが、段差が多い自宅では両手両足を床について移動する。

買い物に行くため、自宅前の道に出て談笑する荒井欣也さん(右)と母めぐみさん(左)、姉柴田清子さん=愛知県一宮市で

体が不自由になったのは、高校卒業直前に起こしたバイク事故がきっかけだ。後頭部を強く打ち、一カ月間入院した。そのころから体の動きが悪くなり、歩きにくくなった。身体障害者の認定は受けたが、原因は不明のまま。

ようやく診断がついたのは事故から五年後。体の動かしづらさが少しずつ増す中、飛行機部品の製造会社でプログラミングの仕事をしていた二十三歳の時だった。主治医は両親に「寿命は長くない。すぐに寝たきりになる」と告げた。

この宣告が、荒井さんにはかえってばねになった。「自分で運動しよう。筋力があれば、病が進行してもごまかせるかも」。今も毎朝毎晩、自宅で自転車型のトレーニング器具によじ登りこいでいる。

それでも自力で歩けなくなり、二十代後半には車いすが必要になった。「友達にこんな姿を見せたくない」と自宅に引きこもった。自分の体に「何で簡単なこともできんのか」と毎日かんしゃくを起こし、物を投げた。存命だった父と取っ組み合いもした。その生活は十年続いた。

それが変わったのは、当時、デイサービス施設で働いていた姉の柴田清子さん(53)=名古屋市名東区=の行動があったから。「過去には戻れないし、外に出て、やれることをやるしかない。介護する母の負担も軽くしないと」。柴田さんは、一宮市内に荒井さんが好きなパソコンを学べる障害者施設を見つけ、「自分をさらけ出したい」と嫌がる弟を横目に手続きをした。以来十一年、荒井さんはこの施設に通っている。

荒井さんにとって柴田さんは、家の外に連れ出してくれた恩人。一方、現在はケアマネジャーとして多くの人の介護計画を立てる姉からすれば、弟は“先生”でもある。何度リフトから落ちて、荒井さんが二階の自室で過ごすのは、今までの生活を変えたくないから。バリアフリーとは無縁な深い浴槽にも、手すりを握って湯船に足をかけて、滑るように入る。荒井さんは「医師には『二階に上がるのはやめろ』と言われる。風呂で転んで肋骨(ろっこつ)を折ったこともある。でも、自分でするのがいい。一度できないと思ってしまうと、どんどんできなくなる」と話す。

そんな荒井さんにひやひやししながらも、柴田さんはぎりぎりまで手は出さない。「あきらめて手を貸せば楽だが、体の機能は低下する。介護はできることを続けてやってもらうために援助すること。弟がそう教えてくれた」(出口有紀)



<生きる支える 心あわせて> (下) 脊髄小脳変性症と歩む 「やってみよう」前向きに



東京新聞 2017年6月29日
インストラクターの青木寿江さん(右)に支えられ、脚を伸ばす運動をする荒井欣也さん=愛知県一宮市で

すっかり晴れ渡り、気温も上昇した五月中旬のある日、愛知県一宮市の荒井欣也さん(49)は、気持ちよさそうに室内プールで泳いでいた。後ろからインストラクターの青木寿江(ひさえ)さん(41)に支えてもらおうと、きれいに脚が水面を蹴る。「水泳選手になった気分」と、笑みを浮かべた。

荒井さんは、小脳が発する運動に関する指令が体の各部位にうまく伝わらなくなる病気がある。体力をつけようと、同市の「たんぼぼ温泉デイサービス一宮」にあるプールに、

週一回通う。

通い始めた八年前は、腹筋や背筋を使う背泳ぎの姿勢が取れず、足が沈んだ。他の利用者たちと三十分、水中で運動した後も自主トレし、できることを増やしていった。インストラクターの奥村里江子さん（42）は「真面目に頑張る人の五人に入る」と笑う。

実は昨年末、荒井さんはプールに通うのをやめようかと迷った。「自分の思いだけでプールに入って、皆に大変な思いをさせているのでは」と思ったからだ。手足に力を入れられず、プールに出入りするときに滑りやすく、時間がかかるようになっていた。

相談を受けた奥村さんは「ゆっくり入ることで、周りに迷惑を掛けていると心配したのでは。そんなことを気にしていると気付かず、申し訳なかった」と振り返る。他の利用者が先に入るようにし、荒井さんは水中運動用の靴をはくようにするなど工夫した。

「荒井さんは障害がある同世代の希望の星。どこまでもフォローしたい」。奥村さんと青木さんは、こう声をそろえる。荒井さんも今は「以前からのもやもやがなくなり、練習に気合が入るようになった」と、安心して通う。

病気を受け入れられず、二十代半ばから十年、自宅に引きこもった。かたくなな気持ちがほぐれ、思いを率直に伝えられるようになったのは、二〇〇六年三月から市の生活介護事業所「みんなの家」に通い始めてから。最初は「自分をさらけ出したくない」と渋々だったが、さまざまな障害がある利用者たちが前向きに生きる姿が励みになった。

今は、パソコンで来年のえとの戌（いぬ）をテーマにしたカレンダーづくりに精を出す。指先が曲がっているため指の節で一つ一つ、キーボードをたたく。「よくしてくれる近所の人たちにも配るから、完璧にしないと」。市内のパソコン講師で、定期的に施設で教える佐藤美和子さん（52）は「以前はこちらが提案したことを、渋々やる感じでしたが、今は自分からしたいことを言う」と話す。

心を開けるようになり、周囲への思いやりも素直に表せるようになった。「自宅で風呂に入って転んでけがをするたびに、おっかあが考え込む」。介護してくれる母めぐみさん（83）の負担を思い、以前は拒んでいた施設での入浴を受け入れるようになった。週三回、施設に通うのも、めぐみさんに畑仕事をしたり、近所の人と茶飲み話をしたりしてほしいからだ。

現在は要介護4。外出は楽ではない。それでも、小さいころから大好きな中日ドラゴンズの試合観戦をあきらめるつもりはない。四月には介助のヘルパーを雇い、ナゴヤドーム（名古屋市）の車いす席で応援した。「無理そうに思えても、やってみんと分からない。引っ込んだると損する」。これからも、外の空気をいっぱい吸っていくつもりだ。（出口有紀）

さすまた使って不審者対応訓練

訓練後、さすまたの使い方を学ぶ職員たち（徳島市で）

◇徳島の障害者施設

不審者の侵入に備えた訓練が28日、徳島市応神町の障害者支援施設「健祥苑」で行われ、職員約40人が緊急時の対応を学んだ。神奈川県相模原市の知的障害者福祉施設で2016年7月に入所者らが殺傷された事件を受け、施設職員の防犯意識を高めようと実施。

訓練では、不審者役の男が施設に侵入すると、職員が110番。男が突然ナイフを持ち出したため、別の職員らがさすまたで押さえこみ、駆けつけた徳島北署員が取り押さえた。

訓練後、職員たちは実際にさすまたを手にして署員から正しい使い方を学び、ほうきや傘で代用する方法なども教えてもらった。

同署生活安全課の梶孝好課長は「施設の入所者と職員の安全が最優先。訓練を重ねながら様々なケースに対応できるようになってほしい」と話した。

読売新聞 2017年06月29日



所在不明の子、全国に28人 虐待が疑われる児童も 西村圭史

朝日新聞 2017年6月29日

居住実態が分からない18歳未満の「所在不明の子」は、今月1日時点で全国に28人いた。厚生労働省が29日、発表した。うち6人は初めて調査した3年前から所在がわからないままだ。調査の過程で居場所がつかめた子どもを含め、虐待が疑われるケースも多い。

昨年6月1日時点で、住民票があるのに乳幼児健診を受けていないなど、市区町村が所在確認が必要と判断した18歳未満の1630人を調査した。その結果、男性15人、女性13人の居住実態がつかめなかった。

調査開始時点でみると就学前の子どもが17人、小学生3人、中学生5人、義務教育修了後が3人。住民票がある都道府県別では兵庫が最も多い7人。ほかは熊本5人、東京4人、栃木・埼玉・長野・和歌山が各2人、茨城・愛知・岡山・山口が各1人だった。

虐待の可能性がある児童は3人。過去に虐待が疑われる情報があったり、学校に通っていないなかったりした。家族の居住実態も含めて把握できない子どもは23人。海外にいる可能性がある子どもは10人いた。出国記録は確認できていないが、出生時から海外にいたり、他国のパスポートで出国した可能性があるという。

18歳未満の所在不明の子供は全国で28人、「虐待恐れ」は3人 厚労省調査

産経新聞 2017年6月29日

住民票の住所におらず学校にも通っていないなど、18歳未満の所在不明の子供が、1日時点で11都県に28人いることが29日、厚生労働省の調査で分かった。市町村が「虐待の恐れがある」と判断した子供も3人含まれており、厚労省は事件に巻き込まれた可能性がないか、所在の把握を進めている。

調査は平成26年11月に初めて公表され、今回で3回目。前回は13都県25人が不明で、前回から引き続いて不明だったのは11人だった。

厚労省によると、所在不明となっているのは、男子15人、女子13人。未就学児17人、小学生3人、中学生5人、義務教育修了後が3人だった。そのうち、二重国籍などで記録が判明せず、海外出国の可能性があるのは10人。警察に通報・相談しているのは17人となった。

今回の調査を開始した昨年6月1日時点では、1630人の所在が確認できていなかった。自治体と共同して電話や家庭訪問を進めたところ、目視で629人の所在を確認したほか、616人が海外へ出国していることが明らかになった。学校に通わせない（ネグレクト）など、虐待が疑われるケースも57人あった。

確認した子供のうち、2人は死亡していたことが判明。堺市の1歳11カ月（不明当時）の男児については大阪府警が昨年、傷害致死容疑などで父母を逮捕。児童手当をだまし取った詐欺容疑でも逮捕されている。東京都新宿区の1歳5カ月（同）の男児についても、母親の元交際相手らが逮捕されている。

米体操選手への性的虐待370件、改善策を発表 読売新聞 2017年06月28日

【シカゴ＝宮崎薫】米国体操協会は27日、選手への関係者の性的虐待について調べていた独立委員会の報告書と、70項目に及ぶ勧告を発表した。

同委員会では、選手160人以上への聞き取り調査を実施。「体操界の体質を変えていく必要がある」と結論づけ、協会の幹部選任などの組織改革、選手のサポート態勢の強化などについて勧告した。

この問題を巡っては、昨年夏に代表チームのチームドクターだった男性らによる女子選手への性的虐待が、20年以上にわたり370件近くに上っていたことが判明。今年3月には、同協会のスティーブ・ペニー会長が引責辞任した。

米国は体操女子の強豪として知られ、昨年のリオデジャネイロ五輪でも団体総合で2連覇を達成している。

リリー&清野菜名、キスシーン切り取ったポスター公開 映画『パーフェクト・レボリューション』



オリコン 2017年6月29日
リリー・フランキーと清野菜名が共演する映画『パーフェクト・レボリューション』のポスターが公開 (C) 2017「パーフェクト・レボリューション」製作委員会オリコン

ドラマ・映画など多方面で活躍するリリー・フランキー(53)が主演し、女優の清野菜名(22)がヒロインを演じる映画『パーフェクト・レボリューション』(9月29日公開)のポスタービジュアルが29日、解禁された。劇中で2人のキスシーンと、初めて出会った瞬間を切り取っている。

同作は、自身も脳性麻痺(まひ)を抱え、障害者の性への理解を訴えつづける活動家・熊篠慶彦氏の実話に基づく物語を、松本准平監督が映画化。熊篠氏の長年の友人であるリリーは、映画化の話を聞き、役柄を問わず協力したいと同作への参加を決断した。

重度の身体障害を持ち、車椅子生活を送りながら、障害者の性に対する理解を訴えるために活動するクマ(リリー)。彼が恋に落ちたピンクの髪の美少女ミツ(清野)

は、人格障害を抱えた風俗嬢だった。2人は、まわりに立ちはだかる壁をぶち壊して、“完全なる革命”を成し遂げようとする。

そのほか、長年にわたってクマをサポートしてきた介護士・恵理を小池栄子、恵理とクマの関係を遠くから見つめる恵理の夫・悟を岡山天音、ミツの病状を理解して彼女を親代わりに世話する占い師・晶子を余貴美子、クマを密かに楽しませる書店員を石川恋が演じる。キャストたちの姿を収めた場面写真も公開された。

「紫蘇ジュース」さっぱり夏味 作業場に香り充満 熊本日日新聞 2017年06月29日



シソの枝から葉をちぎる清香園の利用者たち=宇城市
熊本県宇城市松橋町にある知的障害者支援施設「清香園」で、利用者による「紫蘇[しそ]ジュース」作りが本格化している。3年前から製造しており、さっぱりとした味わいで夏場に人気という。

清香園が製造・販売している「紫蘇ジュース」

ジュースは県のブランド「くまもとの

赤」にも登録。原料のシソは県内産で、約3割は同園の畑で自家栽培している。

今年のジュース作りは26日から始めた。利用者らは枝からシソの葉をちぎったり、鍋で煮詰めて砂糖やりんご酢



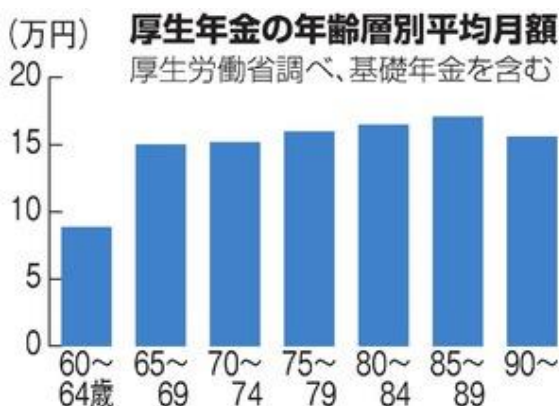
を加えたりする作業を担当。鍋の周りはシソの豊かな香りが充満している。

今年は500ミリリットル入りの瓶900本（1本1800円）を製造予定で、作業は7月上旬まで続く。利用者の橋本洋悟さん（49）＝同市松橋町＝は「水で薄めて飲むとおいしい。多くの人に飲んでほしい」とアピールする。

山内泰人統括施設長（69）は「商品が売れば利用者の収入も増える。今後はシソを使ったサイダーやソフトクリームも開発したい」と話している。（田中祥三）

厚生年金の年代別受給額、初公表

朝日新聞 2017年6月29日



厚生年金の平均月額が60代後半が約15万円で、80代後半は約17万円——。厚生労働省は厚生年金の年齢層別の受給額を初めてまとめ、28日の社会保障審議会（厚労相の諮問機関）の部会に示した。今年4月1日時点で71歳以上の人は年金がより多くなる計算方式が使われていて、若くなるほど減る傾向にある。

加入期間が25年以上ある厚生年金受給権者の平均値を、基礎年金を含めて計算。2015年秋に統合された公務員の共済組合の人らは除外した。

最も多いのは85～89歳の17万959円で、65～69歳の15万118円とは約2万円の差があった。60～64歳は基礎年金がない人が多く、さらに少ない8万8353円。90歳以上は年金の加入期間が短い女性が多いことなどが影響し、15万5788円だったという。

4月1日時点で71歳以上の人の年金は、生まれた年ごとに違う乗率をかけるなどして支給額が決まっており、70歳以下の人より多くなる。乗率は生まれが遅くなるほど低くなる。（井上充昌）

破綻の民間バンクから臍帯血流出 厚労省が実態調査 共同通信 2017年6月29日

東京都や大阪市、松山市、福岡市の12の民間クリニックが国に無届けで他人の臍帯血を投与していた問題で、利用された臍帯血は経営破綻した民間バンクから流出したとみられることが厚生労働省への取材で29日、分かった。厚労省は、個人の臍帯血を有料保管する民間臍帯血バンクの活動の実態調査を始めた。

厚労省によると、流出元とみられるのは、2009年に経営破綻した茨城県つくば市のつくばブレーズ。12のクリニックは他の業者を通じて購入し、計約100人に無届けで投与したとみられるという。

厚労省は、再生医療安全性確保法違反の疑いで12のクリニックの刑事告発を検討している。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんペクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

